

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2017年3月16日放送

「第31回日本乾癬学会 ①

大会を終えて」

自治医科大学 皮膚科
教授 大槻 マミ太郎

学会のテーマ「乾癬、その深淵へ」

本日は、2016年9月2日と3日の両日、宇都宮市で開催された第31回日本乾癬学会学術大会についてご報告いたします。

自治医科大学が本学術大会を担当するのは、もちろん初めてのことであり、乾癬の診療や研究に携わる皮膚科医ならびに関係者の皆さまを、全国から多数お迎えできたことを、あらためて感謝申し上げます。おかげで学会参加者数は1,000名を超える大盛況で、宇都宮駅のタクシーが一時出払ってしまったり、ホテルのお手洗いに長蛇の列ができてしまったりしたことを、この場を借りてお詫び申し上げたいと思います。

学会のテーマは、「乾癬、その深淵へ」としました。2014年に高知で開催された学会でも「深さ」がクローズアップされましたが、「深淵」の「淵」は海ではなく川の中にできた深い場所で、構造的に水の流れがほとんどない、原始の生物の棲息地ともいえます。学会ポスターにある、日光の杉並木を奥へ奥へ進んでいった先には、沼や湖が点在しているわけですが、そのような場所を目指し、乾癬の核心を究明していくイメージで図案を作りました。ちなみに深淵は英語ではabyssといい、「最深ではない」の意のギリシャ語に由来する、広大で底知れぬ場所、混沌、闇。ここに神が光をもたらし、世界が生まれたという解釈もあります。なお、ロゴにイメージされているφは、psoriasisの語源とされるギリシャ語のφάω（擦る）から取りました。

乾癬の病態メカニズムについては、生物学的製剤の登場によってサイトカインネット

ワークの理解が深まるとともに、それらのサイトカインが皮膚以外にも全身に作用して種々の内臓疾患に関わることは、今や常識となり、乾癬およびそれらの併存疾患は、氷山の一角とその下に隠れた大きな氷塊に喩えられるようになりました。しかしながら、乾癬という疾患の発症機序についてはまだ謎だらけで、深淵、abyssの中にあります。

シンポジウム

さて、本学会の目玉となるセッションとして、ホットな話題にスポットがあたるよう、4つのシンポジウムを用意しました。

まず1つめは、乾癬の病態と IL-17 産生細胞です。乾癬の病態、とくにサイトカインカスケードの中でケラチノサイトに近いところ、すなわち最も下流には IL-17 が溢れており、これをブロックする治療が花形になりつつあるわけですが、この IL-17 のソースとなる細胞が何なのか、ホットな議論があります。Th17 や γ δ T をはじめとする T 細胞、自然リンパ球、樹状細胞、好中球、単球、肥満細胞などについて、乾癬の病態における関わりについて6人のエキスパートの先生に論じていただきました。

2つめは、乾癬の発症機序と自己抗原、自己免疫です。乾癬と膠原病、あるいは炎症性腸疾患の合併はしばしばみられることであり、TNF α 阻害薬によるパラドックス反応としても注目されているエリテマトーデスは、乾癬と同様に IFN α がその発症に深く関わることが知られています。また、クローン病をはじめとする炎症性腸疾患は、TNF α 標的のように、乾癬と同様のアプローチで治療が成功する場合と、IL-17 標的のように、そうでない場合があります。そこで、樹状細胞や自己反応性 T 細胞などにも焦点を当てながら、乾癬に合併する可能性もある種々の疾患、すなわち関節リウマチ、エリテマトーデス、炎症性腸疾患、そして皮膚科で最近話題の抗ラミニン γ 1 類天疱瘡を含む水疱症、また乾癬の類縁疾患である掌蹠膿疱症について、他科領域からもリウマチ科、消化器内科、耳鼻科からエキスパートの先生をお招きし、診断や治療について有意義なディスカッションをしていただきました。慶應義塾大学消化器内科の金井隆典先生からは、乾癬と腸内環境の関わりについても、興味深い講演をいただきました。

3つめは、本音トーク 2016、乾癬全身治療の批判的検証です。乾癬の治療面においては、本学会が開催された 2016 年は画期的な年でもありました。生物学的製剤から内服薬、外用薬に至るまで、承認見込み、ないし承認申請の薬剤が目白押しで、新薬ラッシュが続いたからです。治療する側の本音としては、治癒あるいは寛解を保証できるような新薬、例えば IL-36 受容体シグナルを抑制する新規抗体製剤が、その遺伝子異常を有する汎発性膿疱性乾癬患者の治療薬として Proof of Concept が得られれば画期的ではありますが、根治薬でなくとも機序が異なり、有効性や安全性プロファイルも違う治療

選択肢が増えることは歓迎すべきことでしょう。

本シンポジウムでは、乾癬の新規治療に焦点を当てた実践的話題を豊富に盛り込みたいと考え、新薬の臨床試験をこれまで精力的にこなされてこられたカナダの Kim Papp 先生にオーバービューをいただいた上で、生物学的製剤としては新規製剤以外にバイオシミラーの現状と今後についても、また生物学的製剤以外では話題の内服薬、すなわち PDE4 阻害薬や JAK 阻害薬、そして公知申請に向けたメトトレキサートについても、それぞれオピニオンリーダーの先生に解説していただきました。

4つめは、PsA すなわち乾癬性関節炎：リウマチ科と皮膚科の接点です。リウマチ科からは、国際的視野からみた PsA、早期診断と早期治療、国内外のガイドラインについて、そして皮膚科からは本邦の PsA 疫学調査、血清マーカーなどについて、それぞれ講演をいただき、リウマチ医と皮膚科医が連携して PsA の診療にあたる必要性について議論していただきました。

シンポジウムとしてはもう1つ、乾癬研究における女性医師の活躍にスポットを当てたスイーツシンポジウムを、スポンサードの形で設けました。「乾癬研究を推進する女子力」というタイトルで、国内外で活躍する5人の女性医師から、その最新の成果についてご報告いただきました。このセッションは座長、演者すべて女性でしたが、男性の聴講者も多く、極めて好評なシンポジウムとなりました。

特別講演・セッション

本学会の特別講演としては、制御性 T 細胞を発見された坂口志文先生を、また CARD14 遺伝子をはじめ乾癬関連遺伝子を明らかにされたイギリスの Anne Bowcock 先生を教育講演の演者として招聘し、貴重なお話を賜りました。教育講演としては他に、自治医科大学の高橋将文先生と、順天堂大学生化学の横溝岳彦先生をお招きし、それぞれインフラマソーム、ロイコトリエン受容体について有意義なご講演をいただきました。

また、医療以外の分野からも1つ、招聘の企画をいたしました。本学会開催が、リオデジャネイロオリンピックが終了してパラリンピックに向かう間であったこと、そして次回開催が2020年の東京オリンピックということもあり、特別文化講演「オリンピック：リオから東京へ」を JOC 会長の竹田恆和氏に依頼し、リオの興奮冷めやらぬ日本人の活躍を振り返りながら、東京開催に向けた会長としての抱負をうかがいました。

さて、本学会のもう1つユニークなセッションとして、ご自身や家族の人生における乾癬の burden について語っていただく特別セッションがありました。「乾癬が身近にあるということ」と題して、大阪大学の玉井克人先生に「皮膚科医の乾癬」、そして日本

医科大学千葉北総病院の幸野健先生に「父と私と乾癬と」というタイトルで、大変貴重なお話をいただき、これは会長の私みずから座長を務めました。

なお、乾癬教育プログラムとして、J-PEARLS セッションが乾癬学会で毎年継続されていますが、今回はアジアのエキスパートもご参加いただいてディスカッションしたいと考え、韓国と台湾からもゲストをお呼びしました。また、学会終了後には恒例の乾癬患者友の会・学習懇談会が催されたほか、学会サテライト企画として、企業共催にて事前参加登録の教育セミナー、若手セミナーもあり、乾癬診療に携わる若手から中堅の皮膚科医のスキルアップにも役立ったのではないかと考えております。

おわりに

最後になりますが、私自身としては初めての宇都宮開催の学会で、至らぬ点についてこの場を借りてお詫びするとともに、1,000名を超えるご参加をいただいたことにあらためて深謝申し上げます。また、事務局を担当していただいた皮膚科学会の学会チームの皆さま、学会を支援していただいた諸先生、企業、患者会の皆さま、そして最後に教室の関係者にも厚く御礼申し上げ、この学会報告を終了したいと思います。